

転生したら仮面の悪魔 だった件

Tomo Tomo

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転スラの世界でバニルロールをする男の話

目次

1 回目 of 人生の終わり	1
人生（？）リスタートです。	4
初接触	10
どうしてこうなった：	16
初戦闘と洒落込もうか！	20
この世界で生き抜くために。	26
楽しいお茶会	31
ダンジョンを作ろう	42
宣戦布告	47

1 回目の人生の終わり

あの日、俺はいつも通りに帰宅していた。

「あのハゲ頭ああああ！新人だからつてこき使いやがつて!!だが今日はこのすばの新刊の発売日！だから許す。」

今考えるとそんな残業明けのテンションで歩いていたのがバカだった

さつさと帰っておけばよかったのだ

「早く新刊買って読み…」

横断歩道を渡る俺が最後に見たのは赤く光る信号機と運転席に眠っている運転手を乗せたトラックがこつちに突っ込んでくる様子だった。

すぐに衝撃が襲ってきた。

骨が折れ、肉が引きちぎられる音が聞こえる…

俺は直感でわかった

もう助からないと…

(せめて。せめてこのすばの新刊。読みたかったなあ。)

もう死ぬとわかっていながら俺はそんなことを考えていた。

(バナニルは新刊では活躍してるのかなあ。)

バナニルとは「この素晴らしい世界に祝福を」に出てくる悪魔である。

『見通す悪魔』の異名を持つ地獄の公爵にして、真正正銘の大悪魔。七大悪魔の第一席。口元が開いた仮面を被り、黒いタキシードを着た人物で相手の行動や思考、未来と過去も見ることができ、人の心を見透かしたような独特の喋り方をする。

実は本体は仮面で体は土くれでできている。しかも仮面は悪魔で現世で活動するための本体であり、本当の意味の本体は地獄にある。

それに加え残機などといったチート能力もあり、このすばの中でも最強に近い。

人の悪感情、特に人をからかい騙した時に発する怒りや羞恥、失望などの悪感情が大好物である。

(あの強いのに飄々としてるところが好きだったんだよなあ)

《確認しました。個体名「バナニル」を検索…発見しました。「この素晴らしい世界に祝福を」のキャラクター。このキャラクターを元に転生を開始します。転生時に名前「バナニル」を付与…成功しました。ユニークスキル『見通者』ミトガシモノを獲得…成功しました。次にユ

ニークスキル『仮面公爵』を獲得：成功しました。このスキルの持ち主の種族は最低でも上位魔将に固定されます。ダンジョンを作成できるスキルを習得：失敗しました。代案としてユニークスキル『建築者』（タテルモノ）を獲得：成功しました。》

（そう、ウイズとの絡みも好きだったなあ。ポンコツだけど魔法でドカーン！てやってたし、あれ寒くないのかな。）

《確認しました。ユニークスキル『魔術師』を獲得：成功しました。『自然影響耐性』獲得：成功しました。》

（ああ、だんだん痛みが…）

《確認しました。『痛覚無効』を獲得：成功しました。》

こうして俺は1回目の人生を終えた…

人生 (?) リスタートです。

目が覚めたら、俺は洞窟らしき場所にいた。

俺は死んだはずだが…

「……………(´)はどこだ？…え!？」

聞き間違えるはずがない…この声は…

もしかして…

恐る恐る自分の体を見るとそこには黒いタキシードを着た胴体があった…

「もしかしてバニルに転生したのか!？」

じゃあステータスも見られるかな？

そう思い浮かべているとゲームのメニューのようなものが出てきた。

「うわ、本当に出てきたよ…どれどれ…。」

—————

名前 バニル

種族 デーモン悪魔族

称号 デーモンロード悪魔公

七大悪魔 第一席

ユニークスキル

『見通者』
ミトオスモ

思考読破・・・相手の思考を読める。オンオフ可能。

記憶読破・・・見た相手の記憶とその時考えていたことを読める。オンオフ可能。

未来予知・・・見た人の未来を予知できる。遠い未来になるほど曖昧になる。オンオフ可能。自分には使用不可。

妨害困難・・・このスキルの能力は霊力による高度な妨害以外では遮られない。

『仮面公爵』

仮面生成・・・自分の分身となる仮面を生成する。種類は2種類。1つ目は1日1回生成される竜骨製の仮面。2つ目は魔素と原料を使って作る仮面。どちらも乗り移って使うことが可能。その際、体は周りの素材から形成される。また、仮面をつけた生物を操ることもできる。

感情捕食・・・感情を食べ、保管することができる。貯めた感情は後述の残機や悪魔生成、また魔素の代わりとして使える。悪感情の方が質がいい。

残機・・・死んだ時、悪感情のストックを消費して復活する。

悪魔生成・・・魔素や悪感情を利用して悪魔を生み出す。消費した量に比例して強い

悪魔を生み出せる。

『建築者』
タテルモノ

切断・・・ものを切り取る。生物には使用不可。

接着・・・ものをくっつける。生物には使用不可。

加工・・・ものを加工できる。大きさ制限はない。生物には使用不可。

ストレージ・・・ものを収納できる。自身の魔素量に応じて入れられる量に変化する。

『魔術師』

魔法創作・・・新しい魔法を比較的簡単に作れる。ただし、構想や構造は自分で考えなければならぬ。

思考加速・・・思考を1000倍まで加速可能。

詠唱破棄・・・魔法等を使用する際、詠唱が必要なくなる。

森羅万象・・・隠蔽されていない事象の全てを網羅可能。

解析鑑定・・・ものを解析できる。

魔素操作・・・魔素を操作することができる。

エクストラスキル

『万能感知』『多重結界』『空間移動』『魔王覇気』

耐性

『痛覚無効』『物理攻撃無効』『状態異常無効』『精神攻撃耐性』『聖魔攻撃耐性』『自然影響耐性』

—————

一つ言わせてくれ…完全にチートだろこれ

まあ名前もバニルだしバニルロールをするのは確定だな

さーで思考加速と森羅万象でお勉強タイムと洒落込みますか

—————

なるほどね

まあ少しわかったけどもつと情報を手に入れるにはどうやら外に出る必要があるらしいな

そしてもつと重要なことに気づいた

ここ転スラの世界だわ

説明しよう

転生したらスライムだった件とは小説家になろう発祥のライトノベルである。

主人公は三上悟ことリムルIIテンペストである。

いや、スキルの表示から少し感づいてたけど

さてどうしようかね

まあ考えても仕方がないか

まずはスキルを使ってみようか

何にしようか…

そうだあの1日1回の仮面を作ってみよう

「じゃあ…『仮面生成』」

シユン!

空中から仮面が出てきて、地面に落ち、周りの石が形を変え、あの悪魔パニルが出てきた…

うわ! 本当に出てきたよ…

そうだ! これで少し周りを探索してこよう!

この仮面に意識を集中させて…できた!

うわぁー！バニルさん本体すげーイケメンじゃん！

これ本体置いてって大丈夫かな…

一応多重結界は発動させておこう。

よし、バニルロールスタートだ。

バニルさんを意識して…

「では、行くとしようか！良い悪感情を探しに！フハハハハハハハハハッ！」

初接触

いやーそう行つたはいいものの…この洞窟から出なきやなく
暇だしとりあえず思考加速と森羅万象、魔法創作でこのすばの魔法でも作りながら行
こうかなく

—————

ちよつと

全然出れないんですけど…

もう1日は歩いてるんですけど…

3時間ぐらいでこのすばの魔法作り終わったんですけど

他のアニメの魔法も思いつくのは大体作り終わったしなく

そうだ！バニル人形に出口探させよう！なんで思いつかなかつたんだろう！

『自爆人形生成』、出口を探せ！敵は爆破せよ！

コクコクッ

「よし。行けー！」

スタタタツ

…意外と走るの早いのな

—————

さつきからバニル人形が爆破したり、壊されてる。
敵でもいるのかな

お！魔法の使用を感知したぞ！

これは…精霊魔法か？

相性悪いんだけど…

まあとりあえず行ってみるか

まあ対策なしに行くわけもなく

「『仮面生成』数は5。材料は周りの石。『自爆人形隊生成』『防御術式』」

まあ材料は石だけ盾ぐらいにはなるだろ。

自爆人形隊生成はバニル人形を15体一気に生成するオリジナル魔術だ。

防御術式は幼女戦記のやつを魔素を利用して再現した。

計算上、どんな魔法も物理攻撃も込めた魔素以下なら無効化できる。

さてさて転生後最初の接触は…

そこには…

ポロポロになった羽の生えたお姉さんがいた…

「誰ですか！あなた！」

やつとだ！やつと言えり！

「我輩は七大悪魔の第一席、『見通す悪魔』こと、バニルである！」

「さつきから攻撃してきているのはあなたですか！」

よし…このタイミングで「記憶読破」！何々？

…もしやこの記憶は！

「落ち着け、最近成長しきってしまったせいで子供のような振る舞いができず、内心早く転生したいと思っている元精霊女王よ。フハハハハハハハッ！ 汝の悪感情、大変に美味である！」

こいつラミスだ。しかも成長しきった。まあ煽るのは確定だけど。

本当に悪感情って美味しいのね！

「あなた！どこでそのことを！」

「だから落ち着けと言っておるのだ。少なくとも我輩は人形たちに攻撃命令は出しておらん。小娘、貴様が何かしない限りは攻撃はしてこないはずだ。」

「何かしない限り？ ああ、なんか変なのが入りついてるなと思つて精霊魔法打ち込んだわよ。」

「小娘。汝もしかして馬鹿か？」

「馬鹿とは何よ！ 馬鹿とは！」

いや、なんかいたから攻撃するってどうなの

「まあ良い、我輩は戦う気は無い。出口さえ教えてくれればすぐさま出ていこう。」

「オーケー。出口まで案内するわ。」

待つて、すごい近かつたんですけど

俺の1日間の努力は…

外には綺麗な満月が浮かんでいた。

「そうだ、これを渡しておこう。」

そう行つて俺はさつき作った仮面を一枚取り出した

「何よこれ？」

「我輩の仮面の劣化版だ。それがあれば我輩といつても通信ができる。出口を教えてください」

れた恩がある。1つくらいなら願いを聞いてやろう。」

「わかったわ。」

「では、さらばだ！『飛行』」

こうして我輩の物語は始まった：

l s i d e ラミリスー

私は高まつていた緊張がとけていくのを感じていた：

「あいつのスキルが読めなかつた…」

私だつて最古の魔王、鑑定スキルくらいは持っている

しかしあの仮面の悪魔は名前と称号しかわからなかつた。

しかもそこには「悪魔公 七大悪魔第一席」と書いてあつた。

2人目の悪魔公、しかも聞いたことのない称号：

「…ギイに伝えておいたほうがいいわね。」

この頃の我輩も気づいていなかったが、鑑定が出来なかつた原因は問題の称号にあつた：

この世界での称号はあくまで称号であり、普通は効果などはない。

しかし、バニルは違う世界の住民である。

『七大悪魔 第一席』の効果は

この称号の持ち主は誰にも『見通されない』。

簡単に言うと思考読破などはもちろん、スキルなどの鑑定はアルティメットスキルであらうと防ぐと言うものであった：

どうしてこうなった…

やあ、皆の者！バニルである！

あれから1週間が立った。

いやー、色々わかった。

まだ原作までだいぶかかるわ

だってまだ勇者様も活躍中だし、まだヴェルドラ封印されて50年ぐらいいしかたつてないしね

まあ、とりあえず安全は確保された場所を見つけたから本体で活動中であります！

「という事です、少し居座らせてもらおうぞ。ヴェルドラ」

「別にいいが…」

「わかっておる。チエスには付き合つてやるぞ、寂しがり屋の竜よ。おっと、汝の悪感情、美味である！フハハハハハ！」

そういうことで、ただ今我輩はヴェルドラとチエス中です。

いやー、ここ魔物来ないからいいんだよね！

ちなみにさっきの会話は5回目である。

ちなみにちなみに悪感情は高位の存在であればあるほど質が良いみたいである。

お陰でもう残機が5もたまった!

やったね! た○ちゃん! 5回も死ねるよ!

…待てよ…今のフラグでは…:

トウルルル… トウルルル…:

「すまん、連絡だ。」

「勝ち逃げするのではないぞ」

「我輩は契約にはうるさいのだ。ちゃんと続きはやるぞ。」

「はい、バニルである。どうした、光の精に墮落した墮落したと言われて腹が立っている、元精霊女王よ? おっと、1週間ぶりの妖精の悪感情、美味である! フハハハハ!」

《ハァー、ほんとに疲れるわ。今回連絡したのはあの願いが決まったからよ。》

「ほう、言ってみろ。いや、言わんでいい、我輩が確認する。…ほう、なるほど…」

え…マジかよ…:

《ええ、ギイがあなたに会いたいらしいわ。》

説明しよう!

ギイとは

数千年前に戦争のために召喚された悪魔族。敵の国、召喚者の国を両方とも滅ぼして、ギイトと言う名前を得た事で世界で初めての魔王となる。原初の魔王の一柱である原初の赤で、この世界の最強格の一人である。

「了解した。二日後にヴェルドラが封印されている洞窟の前にいると伝えておけ。ではな！」

《ええ！ちよつと！》

ブチ

「どうした、浮かない顔をして。」

「めんどくさい要件ができたのだ、あの内面ちびつ子娘め…」

「これでチェックメイト。我輩の勝ちである！フハハハハ！」

「ぐぬぬぬ…」

「では我輩は少し散歩に行ってくるぞ」

「ああ、気をつけろよ。まあお前なら大丈夫だろうが…」

さて、久しぶりの外だな

二日ぶりぐらいか？

二日後の厄介ごとだが

普通に考えて、ギイのあの性格だったら、確実に戦闘になるだろう。

もちろん戦闘用の魔法も作ってはいるし、残機もあるが…

万全の体勢でお出迎えできるようにするとしようか！

初戦闘と洒落込もうか!

やあ、諸君、バニルである。

ついに来てしまいました…

今日はギイとの約束の日です…

さてと

「本体を頼むぞ。ヴェルドラ」

「ああ、わかったぞ。」

え、誰が本体で行くって言ったの？

いやー、だって、殺されたくないですし

今の持ち物はこの体と本体に付けた余りの竜骨製仮面8枚と悪ふざけで作った魔鋏

石製仮面200枚か…

全部ストレージにしまつてあるけど…

今回はまあ最悪目付けられなきやいいかなあ

「『飛行』『防御術式』」

いつもの魔法で洞窟内を飛行し、すぐに出口までたどり着く。

幸い道は記憶しているので、早く着くことができた。
そろそろくると思うのだが…

お、来たな

未来予知を開始…つと

「よう、お前がバニルか？」

「その通り！我輩は七大悪魔第1席、『見通す悪魔』ことバニルである！」

「ほう、確かに見えないし、強そうだ」

「見えない？なんのことだ？」

「おっと！まずい！」

「じゃあまずは…『熱龍炎覇』！」
ナバームバースト

「純粹な魔法ならば！」

「光の流法『輝彩滑刀』！」
モイド

「炎の龍が襲いかかってくるが…」

「俺の腕から生えた光り輝く刃に切り裂かれ…霧散した」

「この魔法は皆さんご存知ジョジョ2部のラスボスのカーズの技を再現した魔術だ。」

「周りから石や砂鉄を集め、表面で高加速させる。」

これに加え、魔素操作、切断を併用することで魔法まで切れるようにした自信作だ。しかも切り裂かれた魔法は形を維持できず、魔素に戻り、回収できるというエコ仕様。「フハハハハ！いきなり攻撃とは！」

「チツ、まさか切られるとはな！じゃあドンドン行くぜ！」

もう戦闘が始まって30分以上が経っている。

今はどちらも決め手に欠ける状況だ。

ギイの魔法は切り裂かれ、物理攻撃は躲される。

バニルの攻撃はギイのアルティメットスキルに防がれる。

「あつはは！お前やるな！」

「フハハハハ！当たり前である！だが、そろそろ切り札を切る頃合いか。」

「切り札？まだ何かあんのか！」

『銃をこの手に。弾丸は聖弾。用途は射出。数は一つで十二分。』

すると音もなく銃が俺の手に現れた…

『対象はギイ。光速で射出せよ。』

すぐに銃から神々しく光る銃弾が発射され、ギイの右腕を貫通する。

「……はっ。」

ギイもあんな顔するんだな

これがこの2日間、不眠不休で思考加速と森羅万象を併用で作った切り札、『黄金練成』である。

アニメ「とある魔術と禁書目録」に出てくる世界の全てを呪文と化し、それを詠唱完了することで行使可能となる錬金術の到達点とされる大魔法。

俺の場合は魔鉱石製の200枚の仮面をリンクさせ、思考加速と詠唱破棄でなんとか制御している。

詠唱破棄で破棄できないほどの詠唱って多すぎだろ……

まあ、すごい急ぎで作ったから物質の具現化と瞬間移動、空間操作ぐらいしかできないし、魔素の消費量もすごいが……

ギイ……ならなんとかなる。

『動くな、攻撃をするな。』

うーん……抵抗が強すぎて3分くらいしか持ちそうにないな……

普通の魔王なら1時間は持つはずなんだが……

「これでチェックメイトである。汝を殺す気はない。さて、ご用件はなんであるかな?」
「あつはは!こりや驚いた!お前が強いのはわかっていたが、まさか負けるとは!…
ああ要件だったか、要件はない。ただラミリスの話を聞いて興味が湧いただけだ。」
「というのは1つ目の理由で、2つ目は調停者として、と。なるほど調停者殿も大変であるな。」

「…なるほど。思考を読んでいるのか。だから『見通す悪魔』か…」

「まあ我輩は未来と過去も読めるがな。」

「…お前魔王にならないか?」

「…なるほど爆弾は手元に置いておいて管理したいと。…答えは保留である。やりたいことがあるのでな。」

「やりたいこと?何をやりたいんだ?」

「このセリフがやつと言える!」

「まず、ダンジョンを用意し、部下の悪魔たちを配置して、罠を仕掛ける。最奥で我輩自らが歴戦の冒険者たちを迎え撃ち、激戦の果てに敗れ去った後、その背後にある宝箱を開け『スカ』と書かれた紙切れ一枚の中身を見て呆然とする冒険者たちを見る!これが我輩の夢である!」

「…ぶ…あつははは!…そんだけの力を持っていてやりたいことがそれか!お前やつぱり

面白いな！なんかあつたら言え、助けになつてやる。」

「：ほう、本心からそう思っているとは。まあないだろうが何かあつたら言うでしょう。では我輩はもう戻るぞ。そろそろ活動を始める頃合いなのでな。」

「ああ、わがままに付き合ってもらつてすまなかつたな。」

「ではな、なかなかラミスと会えずこの前久しぶりに話せて嬉しかった悪魔よ。おつと、汝の羞恥の悪感情！美味である！フハハハハ！」

さて！本体回収して、本格的に活動開始しますかね！

この世界で生き抜くために。

やあ、諸君！バニルである！

あれから6カ月が経った。

あの戦いは色々学ぶところがあった。

まずはアルティメットスキルに対する対策を急いで立てるべきだということだ。

もちろん切り札の『黄金練成』はほぼチート性能だ。

アルティメットスキルにも劣らないだろう。

だからといって、それに頼りきって足元をすくわれてしまうのは目に見えてい
る。

それどころか『黄金練成』はまだ不完全だからか、火花が普通の魔術より多く発生す
るためあまり使いすぎるのもよろしくない。

火花の活用方法はまだ確立してないしな

そもそも原作キャラとは生きてる年数が違う。

いくら強くてもそれ以上の魔法やスキルを使われたらすぐさまゲームオーバーだ。

そこで我輩はこの術式を再現することにした。

『輝くトラペゾヘドロンと死霊術書をこの手に。』

我輩は規則的に並んだ石の中心で儀式に必要なものを作り出す。

まさかデータの収集などの準備に半年もかかるとは…

だが、やる価値は充分にある。

…これで準備完了だ。

「我輩の夢をかなえるための第一歩である！術式、『分類不能』を発動！」

魔術結社目覚め待つ宵闇所属のヴェイズ率いる別働隊が完成を狙った術式。

その効果は、『学術速度の向上』。

本来、一つの数式を解き明かし、新しい公式の発見と共に学問のレベルが一段階上がるのに三〇年かかるとして、

『分類不能』はそれをたった数秒で終わらせてしまうという大魔法である。

《術式『分類不能』の発動を確認しました。『ヨグⅡソトースの加護』を獲得…成功しました。次に魔術スキル『銀の鍵を持つもの』を獲得…成功しました。》

……あれ？思ってたんと違う？

『ヨグⅡソトースの加護』？『銀の鍵を持つもの』？

なんじゃそりゃ？

まあとりあえず効果見てみるか

――

『ヨグーソトースの加護』

時間停止・・・そのまま。時間を止められる。また、他人の時間停止の効果を受けない。

『銀の鍵を持つもの』

銀の鍵：後述の『叡智の図書館』に入るための鍵を召喚可能。破壊は不可能。

叡智の図書館：あらゆる次元の世界の知恵が集結されている図書館。蔵書数は増え続けているため不明。尚使用中は時間の流れが図書館の中だけ100倍の早さになる。

思考加速：思考を加速する。1000倍まで可能。

並列思考：並列で思考可能。

――

へー、『叡智の図書館』か…

多分銀の鍵はクトゥルフ神話のやつだよな…

『銀の鍵』

スキルを発動させると空間が歪み始め、銀色に輝く幾何学模様があしらわれた12セ

ンチほどの鍵が現れた。

「さて、これからが本題である。『叡智の図書館』」

すぐに鍵が輝き始め、大きな門が現れる。

「ほう、これが入り口のようなだが…。」

中に入ると先が見えないほど長い通路があり壁には一定の間隔でドアと表札がずらっと並んでいる。

「なんだ、ここは…。少し探索してみるとするか。」

探索を始めていくつかわかったことがある。

一つ目はこの図書館はどこまでも続いて終わりがなく、この世界のどこにもないと。

座標を出した時に座標が虚数だった時には無茶苦茶びつくりした。

二つ目は本当にどんな本でもあること。

「科学」「魔術」「言語」はわかるけど、まさか「料理」「裁縫」「絵画」まであるとは…。

まあ「クトゥルフ」のセクションの本は一部文字化けして読めなかったが、
ちなみにドアの向こうはひたすらずっと本棚が並んで、ぎっしりと隙間なく本が
詰まっている。

マジで座標表示の魔術作っておいてよかった

まあ座標が虚数だからちよつとめんどくさいけどね

とにかく「叡智の図書館」は我輩が求めていたものそのものだ！

まずはダンジョンを作るために勉強しますかね！

楽しいお茶会

やあ！諸君！

叡智の図書館にほぼ3ヶ月間こもっているパニルである！

ちなみにダンジョン作りは全くと言っていいほど進んでいない。

原因はただ一つ。

作りたいものが複雑すぎる！

いや、だつてさ！

ずっと地下にこもってるのはちよつとやじやん

人來なそうだし

でも地上に立てるとしても土地がない！

じゃあ…空に浮かばせよう！

てなるじゃん！

まあ立派なダンジョン立てたいから構造計算からやらなきやで無茶苦茶大変なんだ
けど

あれ〜？おつかしいなあ？思考1000倍まで加速してんに全然おわんないな〜

?

あー！もうやだ！数字見たくない！

休憩だ！休憩！

異世界に転生してまで社畜したくないわ！
一回外に出よう

さてと、なにすっかな

ていうか今、朝だったのね

図書館内マジで時間感覚がなくなるわ

そうだ！先週もやったけどお茶会しよう！

『ギイ、ミリム、ラミスよ。聞こえるか？』

『ああ、どうした？』

『おお、バニルか！どうしたのだ？』

『はいはい、聞こえてるわよ？』

えーミリム！と思ったらその君！

そうなのだ！なんとミリムと友達になれたのだ！

原作ぶっ壊してる！だって？

気にするな！！

『お茶会をやろうと思うのだが参加するか？』

『お！いいな！俺は行くぜ！』

『もちろん行くのだ！』

『行くわ！』

ラミリスのテンションの上がりようやばいな

『ヴェルザードも行きたいって言ってるんだが…いいか？』

『ああ、よかろう。』

『お、サンキュー！』

そうだ！奴も呼んでやろう！前は奴を呼び忘れてちやつたからな

『ノワールよ、お茶会をするのだが来るか？』

『…バニルですか。ずいぶん急ですね。いいですよ、何することがなくて暇だったので。』

『では召喚するぞ』

『わかりましたよ』

ああ、ノワールとは悪魔界をお散歩中に会って、戦闘中に見せた魔法が気に入らしく、最近はずっと魔法について話してる。

流石に切り札の黄金錬成は教えてないけどね

『『悪魔召喚』』

魔法の発動とともに黒い魔法陣が現れ、魔法陣の中心からノワールが現れる。

「久しぶりの外の世界ですね」

「少し待っている、すぐに準備する。」

さてと、困った時の黄金錬成！

『大きなテーブルを1つ、ティーカップと椅子を6つ、ショートケーキをホールで一つ、ティーポットを1つ、中には紅茶、もちろんアールグレイ』

ちなみにこの3カ月間でついに黄金錬成は完成した。

といつてもひたすらデータ収集と燃費向上に努めただけなんだが。

この黄金錬成は魔素を一回純粋なエネルギーに変換してから魔法を発動させるため前より燃費がマシになっている。

魔法の発動とともに元々あったかのように物体が現れ、すぐにお茶会の準備が整う。

おっと、やつときたようだ！

「よう！バニル。…お前、ノワールじゃねえか！」

「久しぶりですね、ルージュ。いや、今はギイでしたか。」

「どうしてここにいるんだ？」

「あなたと同じでバニルに呼ばれたんですよ。」

やつぱり仲はいいのな

呼んで正解だったな

「おっと、こつちがヴェルザードだ。」

ギイの横にはたしかに銀髪で青色と白色のワンピースを着た少女がいた。

「初めまして、バニル殿。私の名はヴェルザード。『白氷竜』ヴェルザードです。ギイがあなたのことを言っていたので是非会ってみたいと思っておりましたの。」

さてと、いつもの『記憶読破』に『思考読破』つと

「ギイから聞いているのだろうが、念のため。我輩は七大悪魔の第一席、『見通す悪魔』こと、バニルである！おっと調律者よ、安心せよ。そのへつぽこ調停者にも言ったがこの世界をどうこうする気はないのでな！フハハ！ギイよ、汝の憤怒と羞恥の悪感情！非常に美味である！」

「クソ！アイツ殺す！」

ギイが手に魔法を発動させながら言うが

「フハハ！一度負けた汝が勝てるか？笑止千万である！」

バニルは光の流法モード『輝彩滑刀』を発動させて煽り続ける。

「…ギイがあんなにおちよくらわっているのを見たのは初めてだわ…。」

「…ええ、私もです。」

そろそろ残りの奴らも来ると思うのだが…

「ハア、調停者が喧嘩の仲裁されてどうするのよ。」

「おーい！バニル！来たぞー！」

喧嘩をした2人は魔法を解除する。

「さてと、茶番はこのぐらいにして。お茶会を始めようではないか！」

ちやつかりとラミリスを煽り、ひと段落するとへっぽこ調停者が紅茶を片手に話しかけてくる。

「バニル、お前のダンジョン計画は進んでいるのか？」

「そーそーと言ったところだ。」

「お前ならすぐ作れると思っただが…」

「我輩は神ではない。そう簡単に問題なく巨大建造物が建てられるわけがなからう。この世界を壊しても構わないのならすぐ作れるがどうするかね。」

「それはやめてくれ…」

「ダンジョンとはなんのことですか？」

「私も聞いてないのですが？」

おっと、ノワールには伝えてなかったけど、ヴェルザードも知らなかったか

「なんでもこいつの夢はまず、ダンジョンを用意し、部下の悪魔たちを配置して、罠を仕掛けて冒険者たちを迎え撃ち、負けた後、その背後にある宝箱を開け『スカ』と書かれた紙切れ一枚の中身を見て呆然とする冒険者たちを見ることがらしいぜ。」

「なんですかそれ…」

「やりたいことと労力が釣り合っていない気が…」

「労力などどうでも良い。我輩はやりたいことをやるだけである。」

「ま、いいけどよ。どうせ止められないしなあ。…仕事奪いやがって！」

「フハハハハ！だからへっぽこ調停者なのだ！そもそも止められないなら止められるように努力すればよからう。」

「お前自分の強さわかって言ってるのか!？」

「…ふむ。少し汝に自分の弱さを分からせるべきであるな。」

バニルは真面目な顔になると銀の鍵を取り出す。

「汝に問おう。汝は強いか？」

「ああ、お前には負けたがな。」

「これはまずいな…」

「それがすでに間違っているのである。すでに汝は我輩に負けた時点で強くはない。」

自分の強さに自信のあるギイは不快な表情をさらけ出す

「…その根拠は？…」

「簡単である。汝が負けた我輩が弱いからである。」

バニルは銀の鍵の効果を発動させいくつもの丸い次元の裂け目を発生させる。

そこにはさまざまな光景が広がっていた。

ある世界では英霊たちが殺しあっていた。

ある世界では娘を魔術に殺された魔術師が悪魔と戦っていた。

ある世界では神父と吸血鬼達がロンドンで惨劇を繰り広げていた。

ある世界では武道着を着た戦士が破壊神と戦っていた。

ある世界では不思議な服装をしたハゲが巨大な隕石を吹き飛ばしていた。

この世界でも選りすぐりの強者達が驚愕し、見つめていると次第に次元の裂け目は修

復されていく。

「これらの世界はほんのごく一部にすぎん。これ以上に熾烈な世界などいくらでもある。我輩の切り札を使ったとしても100位に入れるかどうか…。」

「たしかに汝はこの世界では最強かもしれぬが、あまり油断していると足元をすくわれるぞ。」

言うことを全て言うとバニルは紅茶を飲み始め、暗い空気の中でお茶会は再開した。

あの後にはミリムの持ち前の明るさでお茶会は元の雰囲気に戻ったがギイはあの後もずっと考え事をしているようだった。

日が傾き始めた頃、バニルは急に立ち上がる。

「そろそろ良い頃合いである。お茶会はこれにて終了。自分の家に帰るが良い。」

「バニル！このケーキとやらはもうないのか？」

「そのくらいにしておくが良い。そのケーキは元を迎れば濃密な魔素、人間が食べた体が弾け飛ぶレベルのな。我輩達にとっては、無害どころか魔素を回復できる良薬だが許容を超えたら安全は保証できんぞ。」

「むう…。ではまた1カ月後お茶会をすればいいのだな!!」

「…まあそれならばよからう。」

「じゃあまた1カ月後だな!」

そういうとミリムはすぐに飛び立っていった。

「では私たちもこの辺で。」

「私もそろそろ迷宮に帰らないと。」

「うむ、さらばだ竜の小娘とへっほこ妖精よ。おつと、竜の小娘、汝に一つだけ忠告である。『嫉妬には呑まれるな』」

「嫉妬?特に身に覚えはないけど…ええ。わかったわ。」

「私には何かないの?」

「強いて言うなら強いて言うなら威厳の意味を辞書で調べるが吉といったところか。」

「こいつ!!」

「おつと凶星だったか!フハハハハ!汝の悪感情非常に美味である!!」

「絶対に仕返ししてやる!!」

…こゝでずっと黙っていたギイが口を開いた

「…何か俺にアドバイスはあるか?…」

「ふむ、どうやらちゃんと答えた方が良いらしい。

我輩からのアドバイスはたった一つ

汝の欲する所を為せ、それが汝の法テレマとならん。」

「どういう意味だ？」

「これは汝が意味を見つける必要がある。我輩はおしえないし、教える気もない。」

「…ああ、わかった。」

「では我輩はやらねばならないことが山ほどあるのでな。ここで失礼する。」

そういうとバニルは銀の鍵を使って次元の裂け目を作り、去って行った。

ダンジョンを作ろう

そこは不毛の大地と呼ばれていた。

昔暴れ出した破壊の暴君と暗黒皇帝が7日7晩戦い続けたせいで今でも草木は一本たりとも生えず、ひたすらに岩と砂が地平線まで広がっている。

何時もであればそこには誰もいないのだがそこには仮面をつけた悪魔がいた。

やあ、諸君！バニルである！

ようやくダンジョンを建てる目処がたったので必要な場所が取れる不毛な大地に來たわけだが

「いやはや、よくもここまで暴れたものだ…」

これだけの広範囲を長期間人っ子一人住めないようにするとは…

まあ今回に限っては非常に都合がいいからよしとするか

「さてと、始めるとするか。」

その一言で大量の魔素が渦巻き始める

今回使う魔術は名付けるならば『浮遊城作成』とでも呼ぶものであり、使う魔素は竜種換算でも1・5体分という規格外のものである。

そのため5段階に分けて行う

「第1術式起動。」

術式の起動とともに、大量の魔素が周りに撒き散らされ、岩や砂が光沢を持ち始める。これが我輩のダンジョンの原材料になるわけだ。今回はMAVEL作品でおなじみ、ヴィブラニウムを採用している。

だがこれだけじゃ只地面がむちゃくちゃ高価な金属になっただけに過ぎない
ここからが大事な所だ

「第2、及び第3術式起動」

第2術式の起動によって

地面が綺麗に丸くくり抜かれ浮き上がる

正確にいうと魔素を使って無理やり持ち上げているというのが正しいのだが

その広さは何と不毛の大地の約8分の1

まさにバニルの迷宮としてふさわしい

まあ予定してるのはもはや迷宮ではなく国というのがふさわしいがな

そうこうして浮かび上がった巨大なヴィブラニウムの柱が一回振動するとまるで液体のように形を変えていく

これが第3術式

ここで形を形成するわけだ。

そしてこれからが重要なのだが

「やはり魔素切れか……」

いくらバニルの魔素量が多いといってもせいぜい竜種1体分、もちろんこれはトツブレベルなのだが前述の通りこの魔術は規格外の量が必要だ

魔素が完全回復する頃にはヴィブラニウムはそのままだが第2術式が終了し、墮ちてしまう

「だがこれも想定内。」

あれだけ時間を掛けたのだ。これぐらいはわかっていた。

そのための解決策もある

「霊脈との接続……完了。」

霊脈との接続によって最低限の魔力を得る。

「さて、ここからが本番！第二魔法を発動。」

ここに型月世界の魔術師がいたらおそらく全力で弟子入りを志願したか、なんとかしてホルマリン漬けにしようとしたであろう

当たり前だ

これは1つの世界の魔術師のゴールとされたもの

魔術ではなく魔法なのだ

第二魔法。その概要は

『並行世界の運営』

まさに至高の魔法と言えるだろう

第二魔法は滞りなく発動し、バニルの周り大量の魔素が供給される

「これで続けられるな。第4術式起動。」術式が起動するとバニルの手の中に渦が現れる
これは第2魔法の応用である並行世界からの物体にお取り寄せのための渦だ

ここで一回考えてほしい

果たしてこれだけの巨大な構造物を半永久的に浮かせられるほどの動力源はあるだろうか？

もちろんないとは言わない

動力源に心当たりがあるからこれを実行したのだから

その渦に躊躇なく手をつ突っ込み、取り出したのは7つの輝く宝石と光り輝く延棒、そして真つ青に透き通った石を取り出す。

取り出したのはインフィニティストーンと「死にゆく星の心臓」ことウル、そして飛行石。

びつくりするほどむちゃくちゃで世界観を無視した素材だ。

だがこうでもしないかといけない理由がある

それが天使と星竜王とかいう神の存在だ

こいつらからこのクソでかいダンジョンを守るためには下手な魔術炉心では全然賄えない

それどころか飛行状態を維持出来るのかすら怪しいのだ

そこで出来る最大限の素材を準備したに過ぎない

飛行石を主体にウルとインフィニティストーンをミラーボールのようにしてやつと完成！

バニル特製魔術炉心の出来上がり！

ダンジョンとのコネクトもうまくいった

「ダンジョンはできた。あとは人材さえ揃えば吾輩の夢は叶う！」

こうしてバニルのダンジョン製造計画は進んでいく…

宣戦布告

諸君、元気であったか？みんな大好きバニルである！

といつても語りかける相手はいないのだが

バニルがいる部屋には円卓がひとつ席は7つあった

バニルは一番扉から遠い席を引くとそこに座る

これらの家具はバニルが空いた時間で凝りに凝って作ったものであり座り心地は抜群である

ずっとバニルは手下の空間を作っていたわけなのだがある程度自動化できたところで暇になり城の内装を凝り始めたのだ

この椅子1つ取つても外に持ち出ただけで技術が100年レベルで進むであろう
「さてとそろそろくると思うのだが」

別にバニルはこんな広い部屋で時間を潰そうとしているのではない

ちようどいいタイミングで廊下から二人の足音が聞こえてくる

「フム、ドウヤラマニアッタラシイ。」

「ヒューー！ヒューー！きたよバニル！」

騒がしく入室してきたのは

なんとも不気味な二人

やたらと騒がしいのはサングラスをかけてスーツを纏った悪魔と

片言に喋る喋るのは黒いコートを着た半透明で不気味な悪魔

我輩がいうのもなんだがとてつもなく不審だ

彼らは吾輩が聖杯のバックアップを受けて作った最高傑作だ

もう二度と作れないというか作りたくない

まじで大変だった

「さてと、全員集まったのだ。会議を始めよう。」

「さてマクスウェル、それにガスター、何か異常はあったか？」

「ナンニモナカッタゾ、強イテイウナラバ、余剰魔力ノセイデ鉄ガ魔鋼ニナツテシマウク

ライカ。」

「ヒュー！ヒュー！何もなかったよ！」

「そうか、ならば良い。ガスターの件も魔物を発生させるために聖杯から野間両区供給を増やしているのが原因だ。じきに収まる。」

「問題ハ残リノ四席カ」

「我輩としてはこれまで作った悪魔の中で強いやつがなれば良いと思うが」

「ヒュー！ヒュー！それでいいんじゃない！」

「では三日後に開始ということですよいな」

「エエ、イイデスヨ」

「ヒュー！ヒュー！楽しみだね！バニル！」

三日後世界中に震撼がはしった

異変が起きたのは昼頃、男の一言から始まった

「おい、あれはなんだ！」

男が指を指した先には大きなモニターのようなものがあつた

そこには例の3人が写っていた

最初に真ん中に座っている仮面をつけた悪魔が口を開く

「さて諸君！元気かね。我輩は七大悪魔の第1席、『見通す悪魔』こと、バニルである！」

「ヒュー！ヒュー！ボクはマクスウエル！七大悪魔の第2席さ！」

「私ハ、ガスター。七大悪魔ノ第三席デス。ドウゾヨロシク。」

「今回わざわざ映像盤スクリーンを利用したのは他でもない

我々七大悪魔は全世界に宣戦布告する」

「例外ハナイ。今ヲ持ツテ種族ニ問ワズ全テガ我々ノ敵デアル。」

「ヒュー！ヒュー！負けたらどうなるんだろうね！」

「最初の我々の標的は神聖法王国ルベリオスである。襲撃まであと三日」

「存分にあげてくれたまえ」

こうして永遠に続く悪魔との戦いが始まった